人口史から読み解くこれからの日本と静岡県

～富国有徳の“ふじのくにづくり”と静岡県立大学の役割～

知事対談

どんな時に人口は増え、どんな時に人口は減るのか。
人口動態を歴史上の出来事と照らし合わせてみると、現代世界が直面している状態が見えてくる。
人口流出や少子化など、これから日本や静岡県が考えなければならない課題について、
川勝平太・静岡県知事と鬼頭宏・静岡県立大学学長が語り合った。

3つの必然で少子化へ

知事　ご専門の人口史の観点から、現代日本の人口問題について、お聞かせください。

鬼頭氏　日本は既に減少の過程に入りました。出生率が回復してもあと3000万人以上減ることは確実です。世界の人口は中国が2030年代から、インドですら2060年頃から減少に向かうと国連は推計しています。人口が大きく減少する局面というのは生活様式や文明といった舞台装置が大きく転換する時代です。近年の先進国の人口動態は産業文明の終焉と、新しい文明が始まることを示唆しています。現在はそういう転換期だと思います。

知事　人類社会は、新石器革命、農業革命、産業革命などを経ることに飛躍的に人口を増加させてきました。現代は地球資源の枯渇などが深刻になり、産業革命以来の資源消費型の近代文明は終わりつつあるということですね。現代の日本社会では少子・高齢化が問題になっています。

鬼頭氏　少子化は必然的に起きたと思います。若い人の「結婚して自立しよう」という意識が減ってきたなど、社会学者や経済学者は様々な説明をしますが、私は必然であったと考えています。第1の必然は経済的に豊かになると出生率が落ちること。生活水準が上がれば死亡率が下がり、それによって出生率も下がります。あまり死ななければ、そんなに産まなくてもいいという生物としての合理的な行動です。2つ目の必然は1960年代からの公害、70年代からの資源の枯渇、80年代からの地球環境問題などの要因で、子供を持つことを控える人が増えたことです。これは意識・無意識を問わずに起きている現象です。3番目は女性が社会進出する一方で、古い時代のジェンダー観があまり変わっていないこと。つまり、子育てをしながら仕事をすることが非常に難しい。これが日本の少子化を促している要因でしょう。ヨーロッパでもドイツあたりは似た状況です。

知事　日本の人口動態は先進国に共通するところがありますね。日本の人口史を大局的に見ると、縄文時代に数十万人だった日本の人口は、弥生時代から奈良時代にかけて、大きく増えましたね。

鬼頭氏　600万人から700万人まで増えています。

知事　平安時代の中期で640万人、鎌倉時代の初めに680万人ですから、平安時代の中ごろから人口が停滞していたことが分かります。江戸時代の最初は、1200万人ぐらいですか。

鬼頭氏　1200万人から1700万人と言われています。

知事　鎌倉時代からの人口増加は、江戸期に入っても続き、最初の百年間で3000万人ほどにまで増えました。その後は頭打ちで、幕末まで微増です。ところが、明治以降は急増し、1900年あたりで4000万人、さらに増え続け、高度経済成長の1970年代に1億人を超えました。それが反転し、1975年頃から合計特殊出生率が2・0を切り、今は1・5～1・6あたりで停滞しています。人口を維持できるのは2・07ですから、今後は確実に人口が減っていくことになります。

鬼頭氏　そのとおりです。今や少子化は東南アジアなどの新興工業国へも拡がっています。

人口停滞期は女性の時代

知事　平安時代の中後期と江戸時代の中後期の二つの時代は、人口は停滞しましたが、平和な時代です。

鬼頭氏　大きな戦争がありませんから。

知事　平和な時代は女性の活躍が目立ちますね。例えば平安時代。

鬼頭氏　はい、文学での活躍がありますね。

知事　「源氏物語」「枕草子」「更級日記」「和泉式部日記」など、とにかく女性の活躍が顕著です。アメリカの雑誌「LIFE」は「過去1000年間の大きな出来事100」という記事の中で紫式部の「源氏物語」を挙げたくらいです。一方、江戸時代の中ごろからの人口停滞期は、天下泰平で花見や旅行が盛んになり、離婚も増えました。

鬼頭氏　離婚が最近増えたというのは誤りで、江戸時代も多かったのです。しかも女性が一方的に離縁されたのではなく、女性の意志も働いていました。

知事　江戸時代の離縁状は書式にすぎず、実態は再婚許可証だった、という説もあります。女性は、離婚しても元気で、再婚もする。農作業は男女共同、副業の特産品づくりも女性主導で、町民も商家は女性が仕切り、武家社会も同じ家格同士での結婚なので男女は対等。

鬼頭氏　時代の局面、局面で男女の役割の重さは変わると思います。新田開発や都市建設が拡大していく時は、男性労働者の筋肉の力が重視されますが、発展が一段落すると、女性の力が必要になります。江戸時代の場合は農業だけに頼らず、糸を紡いだり布を織るなど女性が主役の副業が盛んでした。それにより農民の家計も豊かになりました。

知事　人口停滞期は、女性の活躍の場が広がって、社会は平和になる。

鬼頭氏　今もそういう時代だと思います。

知事　少子化の背景には、仕事と生活のバランスをとるのが難しい現実があります。子供を生み育てやすい生活環境と職場環境

静岡県立大学学長　鬼頭（きとう）宏（ひろし）氏

静岡県知事　川勝（かわかつ）平太（へいた）

人口史から読み解くこれからの日本と静岡県

～富国有徳の“ふじのくにづくり”と静岡県立大学の役割～

を整えねばなりません。東京の合計特殊出生率は国内最低で1・0余りですが、核家族が集合住宅で暮らし、子育てに協力してくれる祖父母も近くにいない。しかも家賃は高く、共働きの環境が合計特殊出生率を最低にしている一因だと思います。

鬼頭氏　舞台装置ができ上がっていますね。1955年から日本は高度成長期に入りますが、その頃から日本の核家族化が急速に進みます。若い労働者が金の卵として上京し、結婚して、団地で暮らすというライフスタイルの定着は核家族化の進展とぴったり重なります。

知事　1955年に政府が設立した住宅公団が「2DK」を提供し始め、2DK系列のマンションの建設ラッシュを生みます。私はそれを「生活の55年体制」と呼んでいます。東京の少子化は政府の住宅政策が招いたもので、「生活の55年体制」の打破が課題です。東京では望んでも沢山の子供は育てにくい。

鬼頭氏　ところが「持つとしたら何人の子供が理想ですか」という質問に対する回答はずっと2人ぐらいです。社会保障・人口問題研究所が意識調査をしていますが、ほとんど変わっていません。出生率の落ち方と比べれば、とても安定しています。

静岡県立大学学長　鬼頭 宏氏

1947年生まれ。静岡県駿東郡長泉町出身。慶應義塾大学大学院経済学研究科修士号取得。上智大学経済学部経済学科長、同大学地球環境研究所所長、同大学経済学部特別契約教授を経て2015年より現職。

知事　私も大学教員時代に同じ質問をすると、学生の答えは90%以上が2～3人でした。

鬼頭氏　それは動物的と言ってもいいでしょうね。江戸時代は4、5人生んでいて、いかにも多産に見えますが、当時は乳幼児期に亡くなる子供が多かったので、4人生んでやっと男女2人残るという感覚でした。でも今は2人生んでおけばまず大丈夫。その意識は若い人も動物的な感覚で知っているわけです。

高齢者の知恵を生かす

鬼頭氏　今の社会で子供を2人育てるためには、地域など、家庭や学校以外の人たちが関わることが大事です。私はボーイスカウトで地域活動をしていますが、親や教師との間でがんじがらめになっている子供が救われているケースをよく見ます。

　子どもは親を選べません。学校や担任も基本的に選べない。ただ、任意団体なら選ぶことができ、ほかへ移ることもできます。だから子供の生活の一部分を親や教師以外の人たちに任せることをもっと考えても良いと思います。

知事　「おばあさん仮説」というのがありますね。哺乳類のメスは子を産めなくなると死にます。しかし、人類に限って、女性は出産時期を終えても長生きします。進化論的には、子育てをする若い女性に経験を教えて人口増加に寄与したというのです。日本の昔ばなしの「桃太郎」や「かぐや姫」でも、育てるのはおじいさん、おばあさんです。見ず知らずの子を立派に育てたという話ですね。地域の高齢者が子育てに参加することには意味があります。子育てを終えた世代は孫世代に大きく貢献できる力を持っています。

鬼頭氏　そのとおりだと思います。もっと広く言えば、知恵や技能の伝承は高齢者がいない社会では実現しません。この新しい時代に高齢者の役割にはどういうものがあるのか、または何ができるのか。そんなことを意識的に見出していくことは高齢者のためにも社会のためにも役に立つはずです。

知事　今は子育て経験者の経験と知恵が十分に若い夫婦に活かされているとはいえません。保育士の資格がなければダメなどと国から言われてしまう。子供を高齢者と仲良く結びつける仕掛けづくりに知恵をしぼりたい。

観光で地域の魅力を磨く

知事　静岡県では、人口減少とともに、若者の県外流出が問題になっています。自我に芽生えた青年が「東京に行きたい」「外国を見たい」など、外の世界に関心を持つのは健全です。外へ出たいと思っている若者に「出ていくな」と言う大人は料簡が狭い。むしろ、戻って来やすいように、仕事と生活の環境をつくって、故郷を出た青年の帰還を促そうと、県では「30歳になったら静岡県！」運動を始めました。

鬼頭氏　若い頃はトライする時代ですからね。

知事　トライ・アンド・エラーで、青年の失敗に、大人は寛容でありたいですね。トヨタの創業者・豊田佐吉は静岡の湖西に大工の子として生まれましたが、青年期に東京へ行って、新時代を予感し、帰郷し、工夫し、また東京に行くなど、外の見聞を通して郷里で世界的な発明を次々としました。その彼が晩年になって「障子を開けてみよ、外は広いぞ」と言っています。

鬼頭氏　そうですね。人を惹きつけるためには、土地に対する愛とか、人に対する愛とか、そういう魅力を磨いていくべきです。その点で「富国有徳」という静岡県のキャッチフレーズは良いですね。景色だけ良くても貧しい社会ではダメ。豊かさを感じられなくてはいけないし人柄も重要。そういう美と徳と富というものが一体になった地域をどうやってつくっていくのか。それを実現できれば、よそからも人が来るでしょうし、武者修行に出た若者がまた戻ってくる土地にもなります。

知事　静岡県には海外から多くの人がやってきています。多くの民族が交流する時代です。多文化共生を軸にして、誰もが平和で愛情に満ちた、そして希望を抱ける地域づくりをしていく必要があります。

鬼頭氏　そうですね。我々の大学では来年4月から経営情報学部において観光マネジメント教育が始まります。重点は「よそから来てもらう仕掛けをどうやって作るのか」です。それによって観光経営のプロを育てたい。でも、これは技術だけの話ではありません。自分たちの土地の良さをよく知り、より良い暮らしぶりをどうアピールしていくかということです。そのためには地元に自信を持ってもらい、愛着を持ってもらうことが重要だと思っています。

知事　地域を良く知ることと、グローバルな観点をもつことも大切です。

鬼頭氏　経営情報だけではマネジメントの技術に傾きがちになるので、国際関係学部の授業も取り込んで履修できるようにしています。

知事　静岡には県立大学が2つあります。それぞれに個性があり、両大学で来年度から観光にかかわるコースが立ち上がります。内外から多くの学生が集まってくるのを期待します。

鬼頭氏　そして静岡の持っている光を感じてもらい、その魅力に磨きをかけながら交流人口を増やしていきたい。

知事　観光は〝光を観る〟ことですが、自らに光源を持つ人間を育てたいですね。本日はありがとうございました。

鬼頭氏　こちらこそありがとうございました。

静岡県知事　川勝 平太

1948年生まれ。早稲田大、同大学院を経て英オックスフォード大で博士号取得。早大教授、国際日本文化研究センター教授、静岡文化芸術大学学長などを経て2009年より現職。現在3期目。